

Orwell, *Inside the Whale* (1940) 覚書

川 端 康 雄

はじめに

エッセイストとしての George Orwell (1903–50) の仕事は、これまでに数多くのコレクションが出ている。そのため、オーウェルが生前に評論集を二冊しか編んでいないという事実を指摘すると、意外だと思われるかもしれない。本稿で取り上げる *Inside the Whale* はそのうちの最初のエッセイ集にあたる¹。

まずは基本的な書誌情報を確認しておこう。フルタイトルは *Inside the Whale and Other Essays* (以下、*IW* とも略記) で、ロンドンの書肆 Victor Gollancz 社より 1940 年 3 月 11 日に刊行。発行部数は一千部(ただしロンドン空襲によってその内の一部が焼失したので、実売部数はこれより少なかった)、価格は 7 シリング 6 ペンス。中身は

- (1) “Charles Dickens” (pp. 7–85. 25,000 words)
- (2) “Boys’ Weeklies” (pp. 87–128. 10,000 words)
- (3) “Inside the Whale” (pp. 129–188. 15,000 words)

以上の 3 篇から構成されている (Fenwick 90)。3 篇併せておよそ 5 万語になる。“Boys’ Weeklies” は本書の刊行前に短縮版を *Horizon* 誌に掲載しているが、実質上本書は書き下ろしの評論集だった。このうち、ディケンズ論は 1939 年 5 月下旬に書き出し、7 月に脱稿。他の 2 つを併せて、同年 12

月には完成して Victor Gollancz に送っている。およそ7ヵ月間、この3つのエッセイをオーウェルは Hertfordshire の一寒村 Wallington の住居（件ショップ）である “The Stores” で、庭いじりと小間物屋のくらしをしながら書いていた。

念のため、オーウェルの生前刊行のもうひとつのエッセイ集 *Critical Essays* (1946) の書誌データも記しておこう。こちらは（結果的に書き下ろしとなったものを2篇含んでいるが）文芸誌への既出エッセイを著者自身が編んだもので、10篇のエッセイから成っている。便宜的に初出誌、初出年を添えてタイトルを列挙するなら、“Charles Dickens” (*Inside the Whale* から再録、1939) / “Boys’ Weeklies” (*Inside the Whale* から再録、1940) / “Wells, Hitler and the World State” (*Horizon*, 1941) / “The Art of Donald McGill” (*Horizon*, 1941) / “Rudyard Kipling” (*Horizon*, 1942) / “W. B. Yeats” (*Horizon*, 1943) / “Benefit of Clergy: Some Notes on Salvador Dali” (1944) / “Arthur Koestler” (1944) / “Raffles and Miss Blandish” (*Horizon*, 1944) / “In Defence of P. G. Wodehouse” (*The Windmill*, 1946) という構成である。第一評論集から “Inside the Whale” 以外の2篇を再録し、後は主として *Horizon* に掲載したエッセイを加えている。版元は London の Secker and Warburg 社で、1946年2月14日に刊行された（オーウェルがセレクションを終えたのは1945年1月22日だったので、第二次大戦末期の編纂ということになる）。価格は8シリング6ペンスで発行部数は3,028部。第一評論集の3倍の部数を刷ったわけだが、前年の1945年におなじ版元から *Animal Farm* を刊行して大ヒットとなり、多くの読者を見込めるようになったことを考え合わせるならむしろ少ない部数といえる。それは終戦直後の「窮乏の時代」で紙不足であったという事情があるのだろう。じっさい、英国版はその後増刷を重ねている（第一評論集はその版としては増刷はなかった）。なお、米国版が *Dickens, Dali & Others: Studies in Popular Culture* というタイトルでニューヨークの Reynel & Hitchcock 社から1946年4月に刊行され、こちらは初版5,000部が刷られた (Fenwick 246)。

上記のように、第二評論集において、第一評論集の表題作“*Inside the Whale*”のみが外されたわけだが、これはべつだん、1930年代に書いた小説 *Clergyman's Daughter* (1935) や *Keep the Aspidistra Flying* (1936) のように、自己評価が低くて再版に堪えないと判断したわけでないことは、オーウェルの literary executor への覚書 (CW20: 224) から明らかで、いずれ新たな選集に含めてよいと思っていたようだ。じっさい、オーウェル没後のさまざまなコレクションでこれが収録されており、とりわけ1950年代に頻繁に(とくに左翼陣営から批判的に)言及されたエッセイがこれだった。ちなみに、第一評論集とおなじ *Inside the Whale* というタイトルの選集も Penguin 版で出ている。ただしこれは第一評論集と異なる構成で、10編のエッセイからなり、ディケンズ論が抜けている。

つまり、1940年の刊行以後、このエッセイ集とおなじ3篇の構成でリプリントされたことは一度もない。日本語版の翻訳も同様で、私が編集を手がけた平凡社ライブラリーの4巻本のオーウェル評論集では第3巻を『鯨の腹のなかで』と題したが、「少年週刊誌」は第4巻の『ライオンと一角獣』にまわした。『ライオンと一角獣』にポピュラー・カルチャー関連のエッセイ集をまとめることを狙ったため、その方面の代表作のひとつとして「少年週刊誌」をそちらに組み込んだのだったが、第一評論集の表題を使って、別の compilation にしたことについては、前例があるとはいえ、いささか反省の念もある。Peter Davison 編のオーウェル全集(以下、CWとも略記)20巻が1998年に完結して、残されているオーウェルのすべての著作が編年体で刷られてオーウェル研究に欠かせないありがたい一次資料となっているが、ある特定の時期にあえてこの組み合わせで trilogy を出したオーウェルの編集意図に迫るには、その本の物質的な形態にふれる必要がどうしてもあるだろう。

Inside the Whale 所収の3篇をオーウェルは1939年の5月から12月までの間に書いていたと述べた。言うまでもなく、危機的な時期である。前年の1938年9月にミュンヘン会談があり、ネヴィル・チェンバレン首相(在

職 1937-40) がフランス首相とともにヒトラー、ムソリーニと会談をおこない、ドイツの要求に譲歩した。この宥和政策に乗じて、1939年3月にドイツによるチェコスロヴァキアの解体があった。チェコの西半分を併合し、東半分を保護領に、さらにポーランドにダンツィヒ(現グダニスク)の返還とポーランドを横断する陸上交通路を要求。イタリアも39年4月にアルバニアを併合。東西の二正面作戦を避けたいドイツは、ミュンヘン会談での英・仏の態度に不信感をもったソ連に接近し、39年8月に独ソ不可侵条約を結ぶ。こうしてドイツ軍は39年9月1日にポーランドに侵攻。宥和政策の失敗を悟った英・仏は、9月3日にドイツに宣戦布告、ここに第二次世界大戦が開始された。

エッセイストとしてのオーウェルの仕事に注目した Peter Marks は *Inside the Whale* の出版を “his [Orwell’s] most significant step as an essayist” (87) と評している。ディケンズ論、少年週刊誌、そして Henry Miller (1891-1980) と現代文学論——これらをこの執筆時のコンテクストに置いたとき、どのような関連が見えてくるのだろうか。開戦直後の危機的な時代に、対象自体はまったく異なる3つのエッセイを組み合わせた *trilogy* として刊行したオーウェルの狙いは何であったか。以下でそれを考察していきたい。

1. “Inside the Whale”

目次では3つのエッセイの最後に置かれているが、論を進める都合上、この表題作から見ていく。表題に取っている「鯨の腹のなか」というアレゴリーの意味をオーウェルは次のように解説している。

The historical Jonah, if he can be so called, was glad enough to escape, but in imagination, in day-dream, countless people have envied him. It is, of course, quite obvious why. The whale’s belly is simply a womb big enough for an adult. There you are, in the dark, cushioned space that exactly fits you, with yards of blubber between yourself and reality, able to keep up an attitude of the completest indifference, no matter *what*

happens . . . [T]here is no question that Miller himself is inside the whale. All his best and most characteristic passages are written from the angle of Jonah, a willing Jonah. Not that he is especially introverted—quite the contrary. In his case the whale happens to be transparent. Only he feels no impulse to alter or control the process that he is undergoing. He has performed the essential Jonah act of allowing himself to be swallowed, remaining passive, *accepting*. (Orwell, “Inside the Whale,” *IW* 177–178; *CW* 12: 107. 下線は引用者、イタリックは原文)

「歴史上のヨナなどと言ってよければ、その本人は〔飲み込まれた鯨から〕逃げ出したいと思ったことだろうが、想像のなかで、白日夢のなかで、無数の人びとは彼をうらやんできた」と、著者は鯨の腹のなかのぬくぬくとした状態へのあこがれに注意をうながす。作家ヘンリー・ミラー自身、鯨の腹のなかにいることは疑いない、もっともミラーらしい、彼の白眉といえる文章は「自発的なヨナの角度」から書かれている。受身のまま、おのが運命を受け入れつつ、自らも飲み込まれるにまかせるという、本質的にヨナのごとき役割をミラーは演じている——そうオーウェルは指摘する。

このくだりの直前で、オーウェルはミラーと対面したときのエピソードを記している。*Tropic of Cancer* (1934) を読んで感銘を受けていたので、1936年暮れ、内戦が始まっていたスペインに入国する直前に、オーウェルはパリでミラーと対面した。オーウェルがこれから赴くスペインの政治情勢にミラーがまったく関心がないということを知って、オーウェルはびっくりする。好奇心のような利己的な動機で行くならわかるが、義務感で行くなど愚か者のすることだとミラーはオーウェルに語った (*IW* 174–175; *CW* 12: 106)。二人の政治的な立場は両極端である。ミラーからコーデロイのジャケットをプレゼントされたオーウェルはバルセロナに入り、程もなくトロツキスト系の民兵組織 POUM に参加する。その後のバルセロナやアラゴン戦線での日々、また共産党によるトロツキスト系組織の粛清、弾圧、オーウェル自身の負傷の話などは、*Homage to Catalonia* (1938) に

語られているとおりでである。

“Inside the Whale”はミラーの評価を主眼としながら、同時に戦間期の英文学の総括を行っている。3章の構成で、第1章と第3章でミラーの文学的意義を論じているが、とくに第2章で、文学史的な見取り図を示している。A. E. Houseman (1859–1936) の *A Shropshire Lad* (1896) に代表される1910年代の田園詩人の流行を導入として、オーウェルは1920年代の作家たちと30年代の作家たちを対照的に考察している。図式的にまとめると以下のようなになる。

① 1920年代——James Joyce (1882–1941), T. S. Eliot (1888–1965) らを代表とする、非政治的で「目的」意識をもたぬ作家たち。D. H. Lawrence (1885–1930), Eliot, Aldous Huxley (1894–1963), Somerset Maugham (1874–1965), Lytton Strachey (1880–1932) といった作家たちは、それぞれ差異はあるものの、彼らは“tragic sense of life” (*IW* 154; *CW* 12: 96) を有する点で共通する。

② 1930年代——詩人 W. H. Auden (1907–73) の一派に代表される、「正統」左翼のイデオロギーによる“serious purpose” (*IW* 160; *CW* 12: 99) の意識を過剰に帯びた作家たち。“a sort of Boy Scout atmosphere of bare knees and community singing” (*IW* 160; *CW* 12: 99) という皮肉も交える。

③ 後者の文学「傾向」のなかで発表されたミラーの『北回帰線』を「悪を受動的に受け容れる」「鯨の中のヨナ」のごとき作家による作品として重視する。“Its importance is merely symptomatic” (*IW* 187; *CW* 12: 112) とオーウェルは言う。²

以上のような見取り図である。ミラーの評価自体は別としても、非政治的で「目的」意識をもたぬ (Joyce, Eliot らに代表される) 1920年代作家たちと、「正統」左翼のイデオロギーによる「目的」意識を過剰に帯びた (Auden 一派に代表される) 30年代作家たちという図式は、その後の文学史的ナラ

ティヴの祖型になったと言えるだろう。

1930年代から第二次世界大戦初期にかけて、ひとつの重大な転換期にさしかかっているという意識を抱いたのはオーウェル一人ではなかったようであり、過去数十年の総括を行っている著述家が少なからず見られる。社会的な著作としては Graves と Hodge の *The Long Weekend* (1940) が挙げられる。オーウェル以外の文学的総括としては、Cyril Connolly, *Enemies of Promise* (1938) の第一部での “Mandarin,” “anti-mandarin (Vernacular),” “the modern movement” といった語を使つての見取り図、また Virginia Woolf の 1940 年の講演 “Leaning Tower” が注目される。

2. “Charles Dickens”

巻頭エッセイのディケンズ論は本書のなかでいちばん長尺の論考である。端的にいえば、この作家のポピュラリティの秘密に迫ったエッセイといえる。ディケンズの社会批判はもっぱら “common decency” に基づく道義的な批判であり、それが作家としての成功の由来だというのが結論となる。

His [Dickens'] radicalism is of the vaguest kind, and yet one always knows that it is there. That is the difference between being a moralist and a politician. He has no constructive suggestions, not even a clear grasp of the nature of the society he is attacking, only an emotional perception that something is wrong, all he can finally say is, “Behave decently,” which, as I suggested earlier, is not necessarily so shallow as it sounds. (Orwell, “Charles Dickens,” *IW* 81; *CW* 12: 54. 下線は引用者)

社会批判をおこなったディケンズの急進主義的な姿勢は漠然としているものの、それが確固として存在することが見て取れる。その社会のどこが問題なのか、ディケンズは的確な分析ができているわけではないのだが、問題があるということを感じて把握できている。結局彼の主張は「品位をもって振る舞え」ということに尽きるのだが、それは一見して皮相に見えるのであっても、必ずしも皮相ではない、そう言ってオーウェルはディケ

ンズを擁護する。“Behave decently”の“decently”という副詞が、形容詞“decent”と共に、オーウェルが非常に積極的な価値を込めて使った語であることも思い出しておこう。作家としてのディケンズの「顔」について、以下のように述べることでオーウェルはこのエッセイを結んでいる。

It is the face of a man of about forty, with a small beard and a high colour. He is laughing, with a touch of anger in his laughter, but no triumph, no malignity. It is the face of a man who is always fighting against something, but who fights in the open and is not frightened, the face of a man who is *generously angry*—in other words, of a nineteenth-century liberal, a free intelligence, a type hated with equal hatred by all the smelly little orthodoxies which are now contending for our souls. (“Charles Dickens,” *IW* 188; *CW* 12: 112.)

ミラーと現代文学を論じた“Inside the Whale”は、ディケンズが依拠していたこのような“common decency”の消滅と全面的な敗北の可能性について警告を発しているといえるが、Bernard Crickは上記のディケンズ論の結論部分を引用して、オーウェルはここでそうした警告と同時に、“a thin red line of hope”を指示している、と述べている(386)。それは“common decency”の持ち主たる“common people”への希望にはかならない。ディケンズ研究者のHumphry Houseへの手紙でオーウェルは“My chief hope for the future is that the common people have never parted company with their moral code”(*CW* 12: 141)と書いている。

3. “Boys’ Weeklies”の位置

“Boys’ Weeklies”は本書のなかで“Charles Dickens”と“Inside the Whale”の間にはさまる。Brunsdaleが“a pioneering essay on popular culture”(119)と評しているように、「低俗」な文化事象を扱ったオーウェルの一連のポピュラー・カルチャー論の嚆矢となるエッセイだった。オーウェルはこのエッセイが扱う対象とその狙いを次のように書いている。

Here I am only dealing with a single series of papers, the boys' twopenny weeklies, often inaccurately described as "penny dreadfuls." Falling strictly within this class there are at present ten papers, the *Gem*, *Magnet*, *Modern Boy*, *Triumph* and *Champion*, all owned by the Amalgamated Press, and the *Wizard*, *Rover*, *Skipper*, *Hotspur* and *Adventure*, all owned by D. C. Thomson & Co. [. . .] They are on sale in every town in England, and nearly every *boy who reads at all* goes through a phase of reading one or more of them. The *Gem* and *Magnet* . . . have evidently lost some of their popularity during the past few years. A good many boys now regard them as old fashioned and "slow." Nevertheless I want to discuss them first, because they are more interesting psychologically than the others, and also because the mere survival of such papers into the nineteen-thirties is a rather startling phenomenon. (Orwell, "Boys' Weeklies," *IW* 90-91; *CW* 12: 148-149. イタリックは原文、下線は引用者)

大半がヴィクトリア朝の時代に創刊されて1930年代にまで存続している廉価な少年週刊誌に注目することの狙いを以上のように述べているのは、文芸批評としてこのような対象を扱うこと自体が異例であったことと関わる。

Personally I believe that most people are influenced far more than they would care to admit by novels, serial stories, films and so forth, and that from this point of view the worst books are often the most important, because they are usually the ones that are read earliest in life. ("Boys' Weeklies," *IW* 124; *CW* 12: 74)

ハイブラウの観点からすればきわめて低俗な週刊誌ということになるが、少年期に多くの男子児童が読みふけてきた読み物であるがゆえに、「高級」な作品群よりはよほど影響力を及ぼしてきたというわけである。そのイデオロギーが一種の「刷り込み」を少年たちにおこなって、彼らの精神形成に基層部分で作用する。だからこそ、そこに埋め込まれたスノビズム、

物欲、暴力性、保守主義といったイデオロギーは注目に値する。

このエッセイを *Inside the Whale* の発表とほぼ同時期に短縮版で *Horizon* 誌に発表したことは前述のとおりである。オーウェルの学友で気の置けないコノリーが編集長であったということから、寄稿しやすい雑誌媒体であったとはいえ、文芸誌にこのような「低俗」（と文学の基準からすれば見下されていた）少年週刊誌をあえてオーウェルが寄稿したという事実は注目に値する。じっさい、このあと、同誌の1941年8月号には彼は“The Art of Donald McGill”を寄稿している。Picasso だとか Cézanne だとかの“Art”であったなら *Horizon* 向けであったろうが、Donald McGill (1875–1962) はリゾート地の海岸で土産用に売られている艶笑小話を描いた「俗悪」な漫画絵葉書の作者名にほかならない。そのような絵葉書を“Art”として考察するその発想が奇抜と言えるわけで、文芸誌へのこのエッセイの寄稿じたいが、“Art”の観念の価値転換を図る仕掛けとも見える。このようなマツギルの絵葉書の意義はどこにあるか。オーウェルはこう書いている。

If you look into your own mind, which are you, Don Quixote or Sancho Panza? Almost certainly you are both. There is one part of you that wishes to be a hero or a saint, but another part of you is a little fat man who sees very clearly the advantages of staying alive with a whole skin. He is your unofficial self, the voice of the belly protesting against the soul. His tastes lie towards safety, soft beds, no work, pots of beer and women with “voluptuous” figures. He it is who punctures your fine attitudes and urges you to look after Number One, to be unfaithful to your wife, to bilk your debts, and so on and so forth. Whether you allow yourself to be influenced by him is a different question. But it is simply a lie to say that he is not part of you, just as it is a lie to say that Don Quixote is not part of you either, though most of what is said and written consists of one lie or the other, usually the first. (CW 13: 29. 下線は引用者)

オーウェルが民衆文化の諸相に切り込む意義について、肝とすべき論点がここに示されている。“common people”のだれもが分かち合っているは

ずの人間の「サンチョ・パンサ」的側面は、全体主義体制において抑圧され、大勢への順応、刹那的な安楽さへの逃避というかたちでネガティブに利用され、その一方で「ドン・キホーテ」的側面も英雄崇拜、指導者崇拜という面で利用されうる。しかしこの「サンチョ・パンサ」的側面は、本質的に全体主義の精神構造とは水と油の関係にあって、根源的な自由の感覚をとどめることによって、全体主義のイデオロギーを脱臼させる力があるのではないか。そこにオーウェルは「一本の赤い希望の線」を見ていたように思う。私見では彼の一連の民衆文化論のポイントがこれであり、1940年に発表した“Boys’ Weeklies”は、オーウェルの最後の10年間におこなったこの方面の著作の端緒となるものだったのである。

おわりに

オーウェルの文化論的転回はとりわけ“common culture”を射程に入れたものだった。開戦直後の危機の時代に“Charles Dickens,” “Boys’ Weeklies,” “Inside the Whale”の3つのエッセイを組み合わせた trilogy として刊行した狙いは何であったかという問いを本稿の始めに立てた。以下、筆者の一応の結論を述べておく。

最初のディケンズ論が“common decency”の持ち主たる“common people”（道徳律を捨てない decent な人びと）への希望であり、「寛大さをもって怒って」いる19世紀ポピュラー作家の自由な知性と感受性に連なろうとする意思表示であるとすれば、二番目の少年週刊誌論は、民衆文化のイコノロジーを研究した先駆的なエッセイ、最後のミラー論は、全体主義体制に飲み込まれようとする世界のなかでの文学の可能性についての黙示録的な省察といえる。積極的な意味での「自由」がかつてないほど奪われていく危機的な状況のなかで、全面的な敗北の未来を悲観しつつも、これら3篇のエッセイは、その配列の相互作用によって、出口なしと思われる状況に裂け目を生じさせ、そこから思いがけない光が差し込むような——いわばユートピア的モメントを孕んでおり、その点で晩年の二つの物語 *Ani-*

mal Farm (1945) と *Nineteen Eighty-Four* (1949) に連なる性格を有するエッセイ集であると評価できる。³

エッセイ “*Inside the Whale*” が後続の左翼知識人たちに与えたインパクトはとりわけ強いもので、1950年代後半から1960年代初頭にかけてのイギリス・ニューレフト運動の形成期に E. P. Thompson (1924–93) は “*Outside the Whale*” と題する評論を発表してオーウェルの「静観主義」（とトムスンがみなした姿勢）を批判した。“*Inside the Whale*” で「鯨のなか」に引き籠もったヘンリー・ミラーの姿勢について一定の評価を与えたオーウェルの態度そのものを「静観主義」と見なしているわけであり（「鯨のなかの作家」＝ミラー＝オーウェル、という等式を前提としている）、その点ではオーウェルについてのある種の先入観が作用しているように思われる（そうした見方はエッセイの発表直後に Arthur Calder-Marshall が書いた書評にすでに示されてはいた）。それに対して、おなじくニューレフト運動を担った Raymond Williams (1923–88) は *Culture and Society* (1958) ほかの著作において、オーウェルの exile 的な視点に一定の評価を与えている。さらに、「オーウェル年」とも呼ばれた 1984 年に Salman Rushdie (1947–) は “*Outside the Whale*” と題するエッセイを発表し、山田雄三の評言を借りれば、「オーウェルの「鯨の腹のなかに」をカリカチュア化した新しいスタイルで、「帝国回顧」対「帝国排斥」ではないオルタナティブな政治＝文化を想像」（216）した。

このあたりを含め、オーウェル没後現在に至るまでの 60 年間にわたるオーウェル受容を検討するのに、キーテキストである “*Inside the Whale*” を中心にして見てゆくのが有益であると思われるが、それは筆者の次の課題としたい。本稿はその基礎作業として、エッセイ集としての *Inside the Whale* 全体の再検討をおこなった。

注

1 オーウェルが生前に刊行した書物のうち、パンフレットとして Secker and Warburg 社から出した *The Lion and the Unicorn* (1941) と、Collins 社の *Britain in*

Pictures 叢書の一冊として出した *The English People* (1943) は、いずれもエッセイストとしてのオーウェルの重要な仕事であるが、collected essays には当たらないのでここではカウントしない。

2 これについては Q. D. Leavis による同書の書評 (*Scrutiny*, Sep. 1940) での反論がある。ミラーはそこまで持ち上げるほど重要な作家ではないと彼女は言う。

3 その点については拙著『オーウェルのマザー・ゲース』および『葉蘭をめぐる冒険』で論じた。

使用文献

Brunsdale, Mitzi M. *Student Companion to George Orwell*. Westport, CT: Greenwood P, 2000.

Calder-Marshall, Arthur. "A Review of *Inside the Whale*." *Time and Tide* (9 March 1940): 257–258. Meyers, ed. *George Orwell: The Critical Heritage*: 175–177.

Connolly, Cyril. *Enemies of Promise*. London: Routledge, 1938; Harmondsworth: Penguin, 1961.

Crick, Bernard. *Orwell: A Life*. Harmondsworth: Penguin, 1982; new ed. 1992.

Davison, Peter. *George Orwell: A Literary Life*. Literary Lives. Houndmills, Hants & London: Macmillan, 1996.

Fenwick, Gillian. *George Orwell: A Bibliography*. Winchester: St Paul's Bibliographies, 1998.

Graves, Robert, and Alan Hodge. *The Long Weekend: A Social History of Great Britain 1918–1939*. London: Faber & Faber, 1940. New York: Norton, 1963.

Leavis, Q. D. "A Review of *Inside the Whale*." *Scrutiny* (September 1940): 173–176; Meyers, ed. *George Orwell: The Critical Heritage*. 187–190.

Marks, Peter. *George Orwell the Essayist: Literature, Politics and the Periodical Culture*. London: Continuum, 2011.

Meyers, Jeffrey, ed. *George Orwell: The Critical Heritage*. London & Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975.

Orwell, George. "The Art of Donald McGill." *Horizon* 4.21. (September 1941): 153–163. *CW*, 13: 23–31.

—. *The Complete Works of George Orwell*. 20 vols. Ed. Peter Davison. London: Secker & Warburg, 1998. (*CW*)

—. *Critical Essays*. London: Secker and Warburg, 1946.

—. *The English People*. London: Collins, 1942.

—. *Inside the Whale and Other Essays*. London: Victor Gollancz, 1940. (*IW*)

—. *Inside the Whale and Other Essays*. Harmondsworth: Penguin, 1963.

—. *The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius*. London: Secker & Warburg, 1941. *CW*, 12: 391–434. With an Introduction by Bernard Crick. Harmondsworth: Penguin, 1982.

Rushdie, Salman. "Outside the Whale." *Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1891–1991*. London: Penguin, 1991: 87–101.

Taylor, D. J. *Orwell: The Life*. London: Chatto & Windus, 2003.

Thompson, E. P. "Outside the Whale." E. P. Thompson *et al.* *Out of Apathy*. London: Stevens & Sons, 1960: 141–194.

Woolf, Virginia. "Leaning Tower." *Folios of New Writing 2* (Autumn 1940): 11–33.

川端康雄 『オーウェルのマザー・グース——歌の力、語りの力』平凡社、1998年。

——『葉蘭をめぐる冒険——イギリス文化・文学論』みすず書房、2013年。

山田雄三 『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち——英語圏モダニズムの政治と文学』松柏社、2013年。